

早期治療が回復の決め手

【突発性難聴】

ある日、突然に原因不明の難聴に襲われたらどうしますか？
手遅れになると、完治は難しいといわれる“突発性難聴”。
大阪労災病院の耳鼻咽喉科部長・奥村新一さんに、お話を伺いました。



■発症から2週間以内に治療を

ある日突然、どちらかの耳が聞こえなくなるのが、突発性難聴です。外耳道にも、鼓膜や中耳にも、異常はないそう。この突然の難聴は、聞こえなくなったことが自覚できるほど、聴力が低下しているケースが多いとか。

耳鳴りやめまいを伴うこともありますが、めまいは一過性のもので、繰り返すことはないそうです。特にかかりやすい年齢層はなく、すべての年齢に発症する可能性があります。

「突発性難聴は、耳の奥の内耳蝸牛の障害により、引き起こされる難聴です。できれば1週間以内、少なくとも発症から2週間以内に治療を受けることが、治るかどうかのポイントに。1カ月を経過すると、ほとんどの場合、治療効果がなくなります」と奥村さん。10日以内に適切な治療を受けた人の治癒率は、70%とといいます。

■軽度の場合はステロイドで

突発性難聴の原因は、はっきりとわかってはいませんが、内耳の循環障害との説や、ウイルス説があるそう。また、ストレスや疲労が誘因になることもあると考えられています。

「治療は、1週間から2週間、安静入院して受けることをおすすめします。具体的には、ステロイド・ホルモンの点滴か内服治療を行います。これで治りが悪い場合は、デフィブラーゼという点滴療法に切り替えます。これは血流をよくする治療法で、血液疾患などが無い限り、重篤な副作用はなく、難聴の回復にも効果があります。ただし、必ず入院が必要です」

また、補助療法として、高気圧室で酸素を1時間吸入する高気圧酸素療法も。これは血中の酸素濃度を高くして、ダメージを受けた組織を修復するもので、通院でも受けることができる治療法です。

「1週間で治る人もいれば、耳鳴りの後遺症が残る人、中には回復が望めない人もいます。なにより早期治療が大切です」

感音難聴を起こす疾患は、ほかにもあり、中でも注意が必要なのが、耳の奥にできる聴神経腫瘍。この疾患が疑われるときには、MRIを使って調べます。

(医療ライター 那須麻千子)

戻る